

De la place initiale et des éléments extra-prédicatifs en japonais

Yayoi NAKAMURA-DELLOYE
Paris 7 - LATTICE (CNRS, UMR 8094)
yayoi@free.fr

Plan de l'exposé :

I. Éléments extra-prédicatifs en français

1. Éléments extra-prédicatifs dans la structure syntaxique de la phrase française
2. Place et portée des circonstants

II. Éléments externes dans les grammaires japonaises

1. Éléments externes
 - *Dokuristu-go, setsuzokugo*
 - Adverbes de phrase et éléments d'évaluation
2. Moyens d'indication de la fonction externe
3. Hypothèse sur la place pré-thème

III. Études sur le corpus

1. Critères d'extraction des exemples
2. Types de segments extraits
3. Examen d'exemples : éléments d'évaluation
4. Examen d'exemples : compléments temporels
5. Examen d'exemples : compléments spatiaux
 - Syntagmes sans particule
 - Syntagmes en *de* ouvrant un cadre spatial abstrait
 - Travaux de Klingler
6. Examen d'exemples : introducteurs d'autres cadres
7. Examen d'exemples : compléments avec particule de cas

IV. Conclusion

Bibliographie :

- CHAROLLES, Michel. (1997) L'encadrement du discours : univers, champs, domaines et espaces. *Cahier de recherche linguistique*, 6 :1-73.
- CHAROLLES, Michel. (2003) De la topicalité des adverbiaux détachés en tête de phrase. *Travaux de linguistique*, 2(47).
- COMBETTES, Bernard. (1998) *Les constructions détachées en français*. Ophrys, Paris.
- GUIMIER, Claude. (1996) *Les adverbes du français : le cas des adverbes en -ment*. Essentiel français. Ophrys, Gap, Paris.
- ICHIKAWA, Takashi. (1976) 副用語 [fukuyô go]. In 文法I [bunpô I]. volume 6, chapter 6. Iwanami, Tokyo.
- KLINGLER, Dominique. (2003) Spécificité du dispositif créé par le marqueur wa en japonais comparaison avec le français. *Travaux de linguistique*, 2(47).
- KUDO, Hiroshi. (1997) 評価成分をめぐって [hyôka seibun wo megutte]. In 日本語文法・体系と方法 [nihongobunpô-taikeitohôh], ひつじ研究叢書 [hitsuji kenkyûsôsho], volume 14. Hitsujishobo, Tokyo.
- KUNO, Susumu. (1973) 日本文法研究 [nihon bunpô kenkyû]. Taishukan, Tokyo.
- KUNO, Susumu. (1978) 談話の文法 [danwa no bunpô]. Taishukan, Tokyo.
- LE GOFFIC, Pierre. (1993) *Grammaire de la phrase française*. Hachette, Paris.
- MASUOKA, Takashi and TAKUBO, Yukinori. (1992) 基礎日本語文法 [kiso nihongo bunpô]. Kuroshio, Tokyo.
- MIKAMI, Akira. (1953) 現代語法序説 [gendai gôhô josetsu]. Nouvelle édition publiée en 1972. Kuroshio, Tokyo.
- TAKAMI, Kenichi. (1995) 機能的構文論による日英語比較 [kinôteki kôbun ron ni yoru ni-chi-eigo hikaku]. Kuroshio, Tokyo.
- WATANABE, Minoru. (1971) 国語構文論 [kokugo kôbun ron]. Haniwashobo, Tokyo.

Corpus :

- Articles du journal Yomiuri datés du mai 2006
- Trois œuvres littéraires (*extraites du CD-ROM « *Shinchô-bunko no 100 satsu* »)
 - MURAKAMI, Haruki. 風の歌を聴け [kaze no uta wo kike]. Kodansha, 1982.
 - TSUTSUI, Yasutaka. エディプスの恋人 [edipusu no koibito], Shinchosha, 1977*.
 - FUJIWARA, Masahiko. 若き数学者のアメリカ [wakaki sûgakusha no amerika]. Shinchôsha, 1953*.

Exemples avec le contexte large :

[EX.1 : Tsutsui]

一刻も早く異変を、単に変った出来ごととして納得したいという気持ちが、彼らを手近の結論にとびつかせた。「変なこともあるものね」とどめを刺すように七瀬はそう言い、「変なこと」ではあるが、一人前の人間がいつまでもかかわりあっているほどの重要事ではないことを態度で示すため、さっさと彼らから離れて校舎へと歩き出した。さいわいなことに野球部員たちは、そこにあらわれたのがたまたま七瀬という、教務課職員とはいえ私立手部高校随一の美人であったが為に、異変への関心をすぐ失った。彼らは去っていく七瀬のうしろ姿に眼をやり、顔を見あわせ、にやにや笑い、おどけて口を尖らせ、肩をすくめ、眼を丸くし、そうした行為すべてを七瀬が捕捉しているとは夢にも知らず、さほど性的魅力のある歩きかたをしているわけでもなくむしろ男っぽい足どりなのに、その七瀬の歩調にあわせ、アメリカ製イット女優の歩きかたへの連想から例の Boop - oop - A-Doop に似たスカットを胸の中で口ずさんでいた。彼らのスポーツマンらしい乱暴で幼稚でおおらかな性的想像が七瀬にはほほえましかった。

[EX.2 : Murakami]

小さい頃、僕はひどく無口な少年だった。両親は心配して、僕を知り合いの精神科医の家に連れていった。医者の家は海の見える高台にあり、僕が陽あたりの良い応接室のソファーに座ると、品の良い中年の婦人が冷たいオレンジ・ジュースと二個のドーナツを出してくれた。[...]

医者の言ったことは正しい。文明とは伝達である。表現し、伝達すべきことが失くなった時、文明は終る。パチン.....OFF。14歳になった春、信じられないことだが、まるで堰を切ったように僕は突然しゃべり始めた。何をしゃべったのかまるで覚えてはいないが、14年間のブランクを埋め合わせるかのように僕は三ヶ月かけてしゃべりまくり、7月の半ばにしゃべり終えると40度の熱を出して三日間学校を休んだ。熱が引いた後、僕は結局のところ無口でもおしゃべりでもない平凡な少年になっていた。

[EX.3 : Murakami]

僕は以前、人間の存在理由をテーマにした短かい小説を書こうとしたことがある。結局小説は完成しなかったのだけれど、その間じゅう僕は人間のレーゾン・デートルについて考え続け、おかげで奇妙な性癖にとりつかれることになった。全ての物事を数値に置き換えずにはいられないという癖である。約8カ月間、僕はその衝動に追まわされた。僕は電車に乗るとまず最初に乗客の数をかぞえ、階段の数を全てかぞえ、暇さえあれば脈を測った。

[EX.4 : Murakami]

「明日から旅行するの。」 「何処に?」

「決めてないわ。静かで涼しいところに行くつもりよ。一週間ほどね。」僕は肯いた。

「帰ったら電話するわ。」

☆

帰り道、僕は車の中で突然、初めてデートした女の子のことを思い出した。七年前の話だ。僕はデートしている間、始めから終わりまで、「ねえ、退屈じゃない?」と訊ね続けていたような気がする。

[EX.5 : Yomiuri]

証言によると、元役員が昨年6月に契約の見直しを市側に提案したのは、その4か月前に市監査委員から、随意契約による独占委託の問題性を指摘されたため。元役員の求めで市関係部局の課長級幹部が参加した会議の席上、元役員は「いつまでこういう事業を続けるのか。公社としては、もうやめたい」と訴えた。しかし、市側から「引き続きやってほしい」との意見もあり、結論は出なかったという。その後、再び会議が開かれることはなかったが、元役員は「昨年10月ごろから、市、公社職員が（内偵捜査中の）府警に次々と参考人聴取されるといふ衝撃的な出来事があったため、市側も観念して（今年3月末の）契約解除に動いたようだ」と証言している。

[EX.6 : Yomiuri]

耐震強度偽装事件で、警視庁などの合同捜査本部は17日午後、開発会社「ヒューザー」（東京都大田区、破産手続き中）の社長・小嶋進容疑者（52）を、神奈川県藤沢市の分譲マンション「グランドステージ（GS）藤沢」を巡る詐欺容疑で逮捕するとともに、「木村建設」（熊本県八代市、破産）元社長・木村盛好容疑者（74）ら2人を、「サンホテル奈良」（奈良市）の工事代金の一部をだまし取った同容疑で再逮捕した。捜査本部は、代金が振り込まれる前に、3容疑者が建物の強度不足を認識していた点を重視。重要情報を顧客に伏せたまま代金を受け取った行為は「不作為の詐欺」にあたるとして、詐欺罪を適用できると判断した。

[EX.7 : Yomiuri]

19日の専門家会合は午前9時から10時過ぎまで外務省で開かれた。[...] 日本政府は、全国の10か所程度で消費者向けの説明会を開いたうえで、事前査察の条件などについて米側と詰める。最終合意を経て、6月中旬にも再開を正式決定する。その後1か月程度をかけて米国の35施設すべてへの事前査察を行い、輸入を再開する方針だ。専門家会合で米側は、日本向けの牛肉を処理している35の食肉処理施設を対象に行った再点検の結果などに関する報告書を説明した。日本側が求めていた輸入再開の条件については、
〈1〉日本の検査官による施設の輸入再開前の査察を認める
〈2〉輸入再開後にも米側が施設の抜き打ち検査を行い、この検査に日本の検査官の同行を認める——などに応じることに前向きな姿勢を示した。

[EX.8 : Yomiuri]

遺体は、行方不明になったときと同じ服装で靴もはいていた。近くにランドセルと帽子が落ちていた。県警は司法解剖し、死因を調べている。現場は人通りが少なく、通行するのはほとんどが地元の人という。遺体があった場所は、市道から見えにくい所だった。同署によると、豪憲君は17日午後3時ごろ、同級生4人と下校。同25分ごろ、自宅から約80メートルの三差路で、最後まで一緒にいた同級生1人と別れた。その際、迎えに来た同級生の母親が1人で自宅に向かう豪憲君の姿を見ているが、それを最後に足取りはわかっていない。豪憲君は、最後に別れた同級生と、いったん帰宅した後に近くの公園で会う約束をしており、同級生は約10分後に公園に行ったが、豪憲君は現れなかった。同級生が自宅に呼びに行ったところ、父親だけがいて、帰宅していないことがわかった。県警は、豪憲君が最後に目撃された現場から自宅に戻るまでのわずかの間に事件に巻き込まれたとみている。

[EX.9 : Yomiuri]

政府は、社会人の再就職や転職によるキャリアアップを後押しするため、大学で、金融やIT（情報技術）などの講座を学んだ成果を公的に示す「履修証明」制度を創設することを決めた。 [...]

現在、多くの国公立、私立大学が社会人も受講できる公開講座を設けている。講座設置の基準はなく、内容は大学院並みの高度な講座から、一般向けの平易なものまでさまざま。中には、独自に受講したことを証明する文書を発行しているところもある。

新制度について、内閣官房幹部は「履修証明を制度化して、信頼性を高めることにより、企業が人材を採用する際の基準の一つにしたい」と期待している。このため、講座のレベルや受講時間などの基準を示し、それを満たした場合に限って、大学が新制度に基づいた「履修証明」を発行できるようにする考えだ。

[EX.10 : Fujiwara]

「宿題をくれないのですか？」

「宿題を君は欲しいのか？」

「はい」

世の中変わった奴もいるわいと思いながら、「皆、宿題が欲しいのですか？」と念を押したら、てんでに、ほとんどの者が、「ハイ」と言ったので驚いた。昔、あれほど忌み嫌い憎んだ宿題をこの連中は要求しているのだ。我が耳を疑いつつ、「他の教授もそんなことをするのですか」と聞くと、「もちろんです」

[EX.11 : Murakami]

原稿用紙の一枚めにはいつも、「ハッピー・バースデー、そしてホワイト・クリスマス。」と書かれている。僕の誕生日が12月24日だからだ。左手の指が4本しかない女の子に、僕は二度と会えなかった。僕が冬に街に帰った時、彼女はレコード屋をやめ、アパートも引き払っていた。そして人の洪水と時の流れの中に跡も残さずに消えていった。僕は夏になって街に戻ると、いつも彼女と歩いた同じ道を歩き、倉庫の石段に腰を下ろして一人で海を眺める。泣きたいと思う時にはきまって涙が出てこない。そういうものだ。

[EX.12 : Tsutsui]

玄関の間にあぐらをかき、太い指で煙草をつまみながら木下は昔を懐かしむように眼を細めた。だが、細い眼の間からは七瀬の正体を見きわめようとする光が洩れていた。女子大生だという七瀬の身分に彼は半信半疑であった。

(落ちつきすぎている) (世間を知っている) (しかしマスコミ関係者でもない) (まあ芸術家のことだから若い時代の素行の乱れぐらい喋ってもかまわんだろうが) (芸術家の私生活は乱れているものと決まっているようなものだし)

「大変なお酒飲みだったそうですね」七瀬は相槌を打ちながら、女子大生らしく見えるようルーズリーフを開いた。

「そのことはもう、ご本人がそうおっしゃたらしくて、あちこちに書かれていますから」

「そうですかい」木下は少し喋りやすくなった様子だった。すでに七瀬のことを、女子大生と考える以外にない、と結論づけていた。

[EX.13 : Murakami]

彼女がテーブルを片付けてその上に真白な食器を並べている間、僕はワインのコルク栓を果物ナイフの先でこじ開けていた。ビーフ・シチューの湿っぽい熱気で部屋の中はひどく蒸し暑かった。

「こんなに暑くなるとは思わなかったわ。まるで地獄ね。」

「地獄はもっと暑い。」「見てきたみたいね。」